

●平成19年度広島県がん対策推進協議会 第1回計画策定会議の出席報告

「がん対策推進協議会」は昨年秋に発足。その2回目の会議として、「第1回計画策定会議」が6月18日に開催されました。当NPO法人の副理事長である井上委員の代理として、理事の高野が会議に出席しましたので、その概要を報告します。

国の「がん対策基本法」が今年4月から施行され、それに基づいて対策の具体的な目標や達成の時期を定める「がん対策推進基本計画」が6月15日に閣議で決定されました。この基本計画は各都道府県別に策定することになっており、そのために広島県では昨年秋に「がん対策推進協議会」を発足させ、今回が2回目の会議でした。こうした経緯や内容は井上副理事長が、「ニュースレター」19号（昨年11月20日発行）に詳しく説明されていますのでご参照ください。

「がん対策推進基本計画」は、「75歳未満のがん死亡率を10年以内に20%減らす」「患者・家族の苦痛を軽減して生活の質を上げる」が2本柱です。今回の会議には、この基本計画の策定に関わられた垣添忠生先生（国立がんセンター名誉総長、がん対策推進協議会会長）が出席され、これまでの検討の経緯などを要領よく説明されました。この中で、がん対策全体を「国民と患者の視点から進め、医師と患者が対等の立場で取り組む姿勢にした」などの説明があり、がん患者の視点に目線を降ろした国のがん対策に期待を感じました。

会議は垣添忠生先生を交えて進められ、「広島県がん対策の施策の現状」では「がん検診受診率は全国平均を下回っている」などの説明を受け、その後意見交換をしました。そして、「がん予防対策」「がん医療計画」などの「がん対策推進計画」の基本項目に従って1年かけて検討していくことを決めました。

今後は今回の会議で出された意見などが、下部組織の3つの部会「がん検診部会」「がん情報提供部会」「がん登録運営部会」のたたき台となって議論されます。その検討内容をまとめた形で、9月に「第2回計画策定会議」が開催される予定です。

会議の概要は以上ですが、メンバーの中にごがん患者団体の代表として、井上委員が名を連ねていらっしゃいます。出席委員は事前に意見書の提出を求められ、今回の会議では井上委員の意見も事務局から紹介されました。

<井上委員の意見の要旨>

患者や家族の立場から見て、がん患者に必要な情報とは以下のようなことを考えています。

- (1) からだのいろんな部位の異常（各種がん）に対する最適病院選定のための情報
- (2) セカンドオピニオン、電話相談など各種相談窓口に関する情報
- (3) 病院の各種相談窓口の紹介
- (4) 各地域の在宅医の紹介
- (5) 各地域の支援ボランティア団体の紹介
- (6) 各地域の訪問看護、訪問介護施設の紹介
- (7) 実際に治療を受けるときに必要な経費に関する情報
- (8) がんに関する各種保険のわかりやすい説明
- (9) その他、行政が把握している関連情報の提供

今までの活動から、患者さんはこのように多岐に渡る情報を欲していますが、この中でもっとも難しいのが、(1)の最適病院選定のための情報だと思います。できるだけ主観を入れず、例えば各種がん毎の取り扱い症例数など具体的な物理量で情報提供することを考えています。

いずれにしても、広島県、がん診療連携拠点病院はじめ関係各位のご支援が得られれば、微力ながら、「がん患者支援ネットワークひろしま」が広島県におけるがん患者およびその家族に対する情報提供という事業に一定の役割を果たさせていただき所存でございます。

私からは、「がん対策基本法を制定して進めようとしている姿勢は分かるが、テレビを活用するなどもっと県民への広報、PRに努めてほしい。また、県内にはがん患者を支援するなど地道に活動している団体があるので、今後はこうした団体からも患者さんや家族の生の声を聞く機会を作ってほしい」と意見を述べました。

<委員の意見要旨メモ>

- ・広島県の事業として、「医療相談」という形で患者さんや家族が参加できるようなプロジェクトを作してほしい。
- ・「がん登録」は「個人情報保護法」対象外にされているにも関わらず、実際問題では過剰反応を示す人が多く、登録に支障を来しているのが現状である。
- ・県内の拠点病院が実際に役割を果たしているのか、毎年検証していく必要がある。
- ・がんの検診率を上げるために、がんが発見された人には医療費を軽減するなどの、インセンティブを与えるなどの方法もあるのではないか。
- ・「禁煙」もぜひ、広島県のがん対策推進計画に入れてほしい。
- ・患者さんや家族が最も必要な情報は、各種のがんに対して最も適した病院はどこかということである。
- ・放射線治療、化学療法も人材が足りないが、緩和ケアの領域でも同じである。拠点病院と緩和ケア病棟を持つ病院が中心になって、緩和ケアについての連携や人材の育成に当たる必要がある。
- ・広島県の肝臓がんの死亡率が高いが、その原因を分析して、肝臓がんにならないようにするための「予防」に力を入れていかなければならない。
- ・がん対策を5つのがんを総花的に対応していくのではなく、女性に増えている「乳がん」にターゲットを絞って検診率を上げていけば、目に見えた形で成果を示すことが出来る。

<会議に参加した感想>

私は取材する立場ではあっても、取材される側での会議出席ははじめての経験でした。そうそうたるメンバーの中に、当会の理事ががん患者の代表として選ばれていることは意義のあることだと実感しました。

今回は国立がんセンターの垣添名誉総長をゲストに迎えたことで、更に充実した会議だったように思います。しかしながら、先生も指摘されたように、公開した会議に一般傍聴者ゼロはいただけません。会議は今後も公開され、議事録は県のホームページに掲載されることになっていますので、詳細はそちらをごらんください。

今回、私はがん患者支援団体の代表者からのヒアリングを提案しましたが、先日も「がん情報提供部会」の開催案内がありました。この会議には廣川理事長も出席されます。こうして会議には理事長、副理事長が出席して意見を述べられますので、会員の皆様もご意見やご要望がありましたら、当会の事務局へご連絡いただければ何らかの形で反映されると思います。

がん対策に対して、私たちの会がいささかでも役に立つことはうれしいことです。

理事 高野 亨



●「がん患者さんの痛みあれこれ」

先日受診された S さん、肺癌のある部位の背中が痛く、デュロテップ（オピオイド鎮痛剤）を使ってもすっきりしません。量を増やすと気分が悪くなるので、主治医が困ってしまいました。

痛い背中にさわってみると・・・ひどい凝りようです。初めは確かにがんのために痛みが出現したのですが、その痛みのため変に力が入った状態が続き、背中じゅうが筋肉痛になっていました。癌の痛みはデュロテップで緩和され、筋肉痛だけが残っている状態と考えられました。痛みの部位に局所注射を行い、湿布を貼ってもらうことにしました。一般に用いられる消炎鎮痛剤も効果が期待できますが、胃に負担がかかるので飲みたくないと保留にしました。背中中の凝りがほぐれば、もちろん痛み止めの治療は不要になる予定です。

この方のように、筋肉痛が起こっている場合、オピオイド鎮痛剤は今ひとつうまく効きません。凝りをほぐしたり暖めたりマッサージしてもらったり、という対応が必要です。ただし、元々の癌の痛みにはオピオイドが必要ですので、それをおろそかにしてはなりません。

（教訓）オピオイドは万能薬ではない！適材適所！

理事 藤本 真弓

●シリーズ 在宅医のつぶやき

前回は「がんを防ぐための 12 か条」をご紹介しましたが、今回からはそれぞれの項目について少し詳しくお話ししていきます。

1) バランスのとれた栄養をとる

私たちの健康を守る第一のカギが、毎日の食事であることはいまでもありません。栄養のバランスがくずれると、様々な形で体に支障があらわれ、更には病気の原因にもなります。がんもその例外ではありません。

例えば、乳がん、大腸がん、子宮内膜がん等は、脂肪の摂り過ぎと関係があるといわれています。その他にも、あまり大量に食べると発がんの心配がある食品もわかってきています。反対に発がんを抑える栄養素として、ビタミン A、C、E などが注目され、食物繊維にも発がん抑制の効果があることが知られています。よって、食事の際にはできるだけ多くの種類の食品をとり、食物中の発がん物質の作用を相殺していくことが大切です。

偏食せずに色々なものをバランスよく食べるということは、栄養面ばかりでなく、発がんの危険性を低下させるという点からも大切なことなのです。

理事 田村 裕幸

●Dr. 津谷の「癌予防シリーズ」

担当の津谷先生は、毒ガス障害者支援でイラン出張のため「脳みそが空だき状態」のようです。残念ながら今回はお休みです。次号をお楽しみに。

●会員からの投稿原稿

がん体験者であり医師である会員の井上林太郎さんから、前号に引き続きがんに関連した推薦図書のご紹介をいただきました。

S-1 誕生 —国産初の世界レベル抗癌剤開発秘話—

白坂哲彦著 エビデンス社 2006年 初版

はじめに

胃癌は抗癌剤の効きにくい癌と言われていた。この流説を変えたのが、フッ化ピリミジン系抗癌剤 S-1 である。2007年1月米国臨床腫瘍学会(ASCO)で、1,059症例を対象にした大規模臨床試験の結果が発表された。3年生存率は、手術単独群では、70.1%であったのに対し、術後に S-1 を内服した群では、80.5%であった。この薬を開発・発明されたのが、本書の著者、白坂哲彦先生なのである。副作用も少なく、一番多いのが食欲不振で6%であった。このような薬はどのようにして生まれたのであろうか。白坂先生はどのような先生なのであろうか。

著者のご経歴

1971年；徳島大学大学院医学研究科入学(主任教授、藤井節郎)。

1976年；藤井先生と共に、大阪大学蛋白質研究所へ。

1984年；藤井先生と共に、大塚製薬(株)琵琶湖研究所へ。

1990年；大塚薬品工業(株)創薬センター・病態医化学研究所所長に就任。

1991年；S-1(TS-1)誕生。

S-1 誕生まで

1997年11月大塚薬品は厚生省に「ティーエスワン」の申請を行った。プロジェクト名、治験名が「S-1 エスワン」(白坂先生(S)の最初のプロジェクト)であり、商品名も「エスワン」にするつもりであったが、既に、動物用薬品に「エスワン」というのがあり使えないので、大塚の T を加え「TS-1 ティーエスワン」となった。これには、白坂哲彦の T.S.もかけてある。

1957年チャーリー・ハイデルバーガーらにより、5-FU(フルオロウラシル)が開発された。癌細胞に集まりやすく、血液癌のほか、胃癌、大腸癌などにもある程度の効果があった。しかし大きな欠点は、i) 血中濃度が投与後すぐ下がり、抗癌作用もそれに比例して下がる、ii) 消化器毒性の副作用が強い、であった。

1967年ソ連のギレルらが、血中濃度を保つ目的で、肝臓で5-FUになる注射薬テガフルを合成したが、副作用が強く臨床応用できなかった。大塚薬品は、1970年このテガフルに一早く注目し、国立がんセンターの木村禧代二らと共に、経口薬にした。すると、吐き気、下痢など、ある程度まで軽くすることができ、患者さんに使えるようになった。しかし、まだまだ満足できるものではなかった。

1976年藤井節郎らは、テガフルとウラシルと一緒に投与すると、ある程度まで血中濃度を維持できることを見出した。ユーエフティ(UFT)という名で販売された。しかし、UFT をこえる薬の開発が必要であった。

1984年藤井らは、5-FUの血中濃度が維持できる、BOF-A2を開発する。1989年、藤井節郎先生が食道癌にて永眠される。同年、副作用が強いため、研究中止となる。

1991年白坂哲彦らは、TS-1を開発する。テガフル、ギメラシル(CDHP)、オキソン酸カリウム(Oxo)の合剤で、CDHPは体内5-FUの分解されるのを阻害し、5-FUを高濃度に保つ作用がある。Oxoは消化管に対する副作用を軽減する。経口薬なので、通院によって加療できる。5-FUを進化させた画期的な薬が誕生したのである。

感想・まとめ

抗癌剤の研究・開発、臨床試験というと、お金がかかる、製薬会社が金の力にものをいわせて医者を抱きこみデータを出している、製薬会社と医者のよからぬ関係など、マイナスの印象が強い。しかし、本書を読むと、このような考えは払拭される。

藤井先生は、「医学には基礎も臨床も無い」「実学に結びつく研究が重要」という信念に基づいて、産学協同の立場から製薬企業と共同で研究を進められた。

その一方で、「製薬会社から多額の研究費および研究員をもらって、潤沢な予算で大学の範囲を超えた研究をやっているのはおかしい」との批判もあった。他人から疑惑の目で見られたくないという思いで、最終的には、大塚製薬の研究所に移られるのである。

TS-1 誕生には、基礎研究に 15 年、臨床試験に 6 年、承認までに 1 年、計 22 年がかかった。藤井先生、白坂先生の一本気な研究姿勢・態度にも敬意を払わずにはいられない。

消化器症状が少ないことも TS-1 の大きな特徴である。これは、白坂先生のご経験にも基づいている。UFT の臨床第Ⅱ相試験が行われている時、御父様が肝臓癌に罹患された。御父様は医師であり、抗癌剤が効きにくいことをご存知であったが、この試験に参加された。投与 3 日目に「何を食っても全然味がせえへん。コメの飯を食つとるのに砂を嚙んでいるようや。」と言われ、中止となった。その後、食事ができるようになり、御父様の本当に満足そうな顔を見られ、「食欲不振をなんとかしないと・・・」この経験もあり、先生は、「メシが食える抗癌剤」にするため邁進されたのである。

最後に、BOF-A2 の開発を中止することになった時の白坂先生の思いを記す。

「これは企業側にとって大変辛い選択です。それでも潔く撤退を決断したのは、治験を担当してくださった医師たちに対する信頼に加え、私たちにも患者さんのためにならない薬は作れないという矜持があるからです。抗癌剤開発に賭ける『志』があるからです。それがあからこそ、毎日夜遅くまで飽きもせず癌細胞を移植したラットやマウスの観察を続けることが出来るのです。」

会員 井上 林太郎



●第3回がん患者大集会のご案内

- 日時 2007年8月26日（日）午後1：00 ～ 5：30
- 会場 広島国際会議場
〒730-0811 広島市中区中島町1番5号（平和記念公園内） TEL(082) 242-7777(代)
- 入場無料
- 主催 がん患者団体支援機構・第3回がん患者大集会実行委員会
- 連絡先 事務局（TEL/FAX 0848-24-2423 E-mail: info@daishukai.net）

がん患者大集会はこれまで「変えよう日本のがん医療、手をつなごう患者と家族たち」をメインテーマに掲げ、第1回（大阪市）、第2回（東京都）を開催しました。

2007年はがん対策基本法が施行された記念すべき年です。そして、どこに住んでいても誰であっても最善・最適の治療を受けられるようにしていくために、国や地域のレベルでがん医療を変革していく大事な出発の年です。

今回は特に、緩和ケア、がん患者と家族の心のケアを主要課題として、患者・体験者・家族と医療・介護・福祉に携わる方々と、ボランティア、さらにはがん医療に関心のある方々に広く参加を呼びかけました。講演、シンポジウムを通して、共に考え、話し合い、そして共感し、連帯し、よりよいがん医療へ変革していく大きなエネルギーを生み出したいと思っています。

○ プログラム

1. ご挨拶

名誉大会長 田原 榮一 氏 [財団法人 広島がんセミナー理事長]

2. がん患者と家族の思いを伝えよう

荒金 幸子 氏 [呉共済病院師長／乳がん患者]

川守田裕司 氏 [岩手にホスピス設置を願う会]

逸見 晴恵 氏 [エッセイスト]

中島 英子 氏 [胃がん患者]

3. 特別企画 がんになっても幸せな毎日を送るために

「がんと心のケア：希望を支えるサイコオンコロジー」の取り組み

内富 庸介 氏 [国立がんセンター精神腫瘍学研究部部長]

「緩和ケアの広がりをめざして」～広島県緩和ケア支援センターの取り組み～

本家 好文 氏 [広島県緩和ケア支援センター]

4. シンポジウム がん患者の心と体の痛み

コーディネーター 伊藤 一亘 氏 [中国新聞社]

がん患者及びその家族

厚生省がん対策推進室

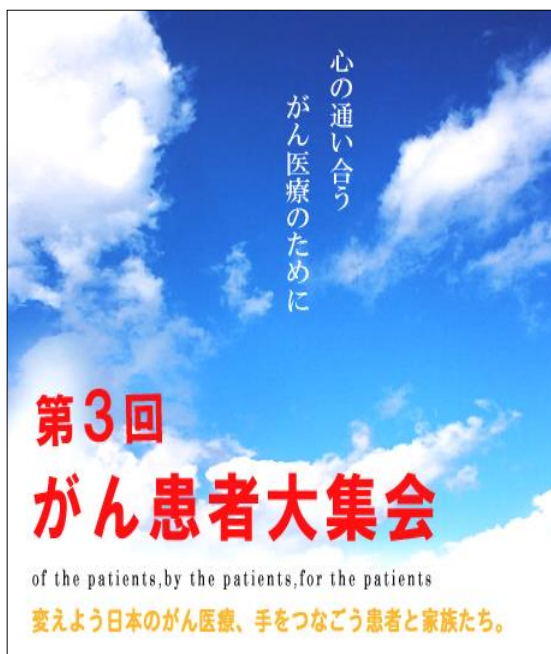
石口 房子 氏 [YMCA訪問看護ステーション・ピース所長]

栗原 幸江 氏 [静岡がんセンター緩和医療科心理療法士]

毛利 祐子 氏 [がん心のケアの会代表（乳がん患者）]

5. 大会アピール

俵 萌子 氏 [がん患者団体支援機構 理事長]



●広島県内のがん関係イベント情報

○ 第48回市民公開講座

日時：2007年7月22日(日) 午後2時～4時30分

場所：広島国際会議場 地下2階「ヒマワリ」

テーマ：「21世紀がん治療の最前線—②」

内容：「肝臓がん」板本敏行（広島大学先進医療開発科学講座外科）

「胆嚢がん」田中恒夫（島根大学消化器総合外科）

「膵臓がん」岡 正朗（山口大学消化器腫瘍外科）

参加費：無料（定員800名・申込不要・先着順）

主催：日本消化器病学会中国支部・中国新聞社

連絡先：広島大学大学院先進医療開発科学講座外科学(TEL082-257-5222 FAX082-257-5224)

○ 平成19年度第2回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」

日時：2007年7月28日（土）午後2時～4時15分

場所：中区地域福祉センター 5階大会議室

テーマ：「外来化学療法の実状と展望」篠崎勝則（県立広島病院臨床腫瘍科部長）

「がんの転移とその診断方法」廣川裕（当会理事長）

受講料：当会会員：800円、協力団体会員：1,100円、一般：1,300円

連絡先：事務局（TEL/FAX 082-249-1033 E-mail：info@gan110.rgn.jp）

○ 平成19年度第3回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」

日時：2007年9月29日（土）午後2時～4時15分

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ（袋町小学校隣）

テーマ：「前立腺がんの治療法について」碓井 亜（広島大学病院泌尿器科教授）

「前立腺がんの診断法」廣川 裕（当会理事長）

連絡先：事務局（TEL/FAX 082-249-1033 E-mail：info@gan110.rgn.jp）

○ 中四国放射線医療技術フォーラム2007公開シンポジウム

主催：日本放射線技術学会中国四国部会、日本放射線技師会（中国四国各県）

日時：平成19年11月10日（土） 14：40～17：00

会場：アステールプラザ 第二会場（約600名収容）

テーマ：「がん診療における放射線治療の役割：あなたは放射線治療を知っていますか？」

1. 基調講演「佐々木禎子さんと放射線治療専門医の私との出会い」

米国MD アンダーソンがんセンター 放射線腫瘍科教授 コックス（上田）律子

2. 「私が受けた前立腺がんの放射線治療（仮）」

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員 坪井 直

3. 「放射線治療ってこわい？」

広島大学病院 看護部 看護師 岩波由美子

4. 「正確で安全な放射線治療」

広島国際大学 診療放射線学科 教授 熊谷孝三

5. 「がんの放射線療法に期待する」

医療ジャーナリスト 大谷克弥

総合討論とまとめ 司会（廣川 裕、大野吉美）

○ 第17回広島がんセミナー県民公開講座

テーマ：「広島地域のがん医療の取り組み」

内容：「がん医療・国・地域・個人の役割」 土屋了介（国立がんセンター中央病院院長）

「広島大学病院におけるがん医療の取り組み」 浅原利正（広島大学学長）

「がん医療に対する県立広島病院の取り組み」 大濱紘三（県立広島病院院長）

「広島のがん医療への期待」 迫井正深（広島県福祉保健部部長）

「がん六回人生全快」 関原健夫（JIS&T 代表取締役社長）

日時：2007年11月10日（土）午後2時～16時

場所：広島国際会議場 地下2階「ヒマワリ」

参加費：無料（事前に登録が必要）

主催：財団法人広島がんセミナー

連絡先：事務局（TEL 082-247-1716 FAX 082-247-0864

<http://www.convention.co.jp/hcs/>）



●編集後記

今年は水不足を心配しながら梅雨入りしましたが、まずまずの降雨でひとまずは安心でしょうか。それにしても、この時期、急に暑くなり湿気が多くなると、身体がついて行きません。何をすることも根気が続かず、自らにむち打っての生活です。病を抱えている方には辛い季節となりますが、どうぞ無理せず暑さを乗り切ってください。(ま)

-
- 発行： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局
<http://www.gan110.rgn.jp>
 - お問い合わせ： info@gan110.rgn.jp
TEL & FAX：082-249-1033
 - Copyright： NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

このニュースレターは、当会の会員に配付しております。
当会の活動を充実させるため、入会希望者のご紹介をお願いします。
